

戦史資料調査

昭和三年一月十五日調査  
花薄港陸軍病院

1918

凡例

一、本冊ハ昭和三年一月四日合參復第号ニ基キ調製セル

戦史資料ナリ

三、昭和三年八月九日蘇聯ノ日本ニ對スル宣戰ノ布告ヲ知リ当院ノ命運日夕ニ迫リタルヲ覺悟シ一切ノ環境ヲ

整理シ全員玉碎ニ歩前ノ準備ヲ完整ニ患者及之ニ要スル最少限度ノ衛生材料糧秣被服等ヲ至短時間内

ニ中央山脈ニ輸送スル如ク準備ス數日後終戦トナリ上司ノ命ニ依リ大部分ノ書類ヲ焼却ス依而当院ニ據ルハキ切

ノ書類ヲ有セス終戦迄ノ諸報告ハ總テ上司ニ提出ス  
ニ付戦史資料ハ第十方面軍及陸軍省ノ書類ニ據ラサ

ルヘカラスルモ復員ニ伴ヒ命ニ依リ記憶ヲ辿リ調製セル  
ニ付大綱ニ誤リナキモ細部ニ至リテハ確度ニ程度トス

1919

陸軍

戰史資料調書

部隊名 花蓮港陸軍病院 (台灣第三九部隊) 部隊長名 軍醫中佐 横山登

部隊履歴概要

本院 昭和十九年度

1. 軍令陸甲第四七号ニ據リ花蓮港陸軍病院臨時編成下

令(十六令)ニ第病院)

2. 編成第一日昭和十九年五月二十五日編成後任部隊台南陸軍病院

3. 六月首台南出發六月四日基隆着六月五日輸送船鳳山丸ニ依

リ基隆港去帆同日花蓮港上陸(当員人員院長以下六三貨

物約八百梱)

4. 六月十日編成完結

5. 自六月十日 台南陸軍病院花蓮港分院跡 花蓮港市公會堂

同記念館 朝日國民學校 明治國民學校 及花蓮港木材

株式會社ニ階ヲ使用、病院任務服ス

1920

6. 九月三日 合作命丁第五号 第十方面軍命令ニ依リ花蓮郡

壽庄地南ニ移駐(建物臨時構築物等葺不造)

久自九月三日 至十月五日 右ニ在リテ病院任務ニ服ス

一日 現在入院患者最高八百五十名ヲ算ス

昭和二十年年度

1. 自一月一日 至八月十五日 花蓮港廳花蓮郡壽庄地南ニ在リテ病院任務

2. 八月十五日 終戦

3. 自八月十六日 至十月五日 右同

昭和二十一年年度

1. 当院歸國乗船ノ爲メ基隆集中行動トシテ花蓮港埠頭

附近ニ患者集合所ヲ開設シ地南本院ノ職員患者ヲ逐次

患者集合所ニ前進セシメ(職員ハ其ノ患者集合所職員トシテ)

之ヲ自動車トシテ依リ逐次蘇澳患者集合所(台東陸軍病院

開設)ニ分割輸送シ一月二十日之カ任務完了ス

自昭和二十一年二月二十九日  
至 二十一年二月二十日 患者集合所

2. 自一月一日 本院 (在地南)  
至一月十五日

患者集合所及之必要診療科人員經理衛生材料關係人員  
ヲ患者集合所ニ前送セシメタル後ハ主トシテ接收後ノ保管軍  
需品ノ現物引渡及警戒人員ヲ残留セシメ一月十五日ノ夕引渡  
(中國軍保管責任者ニ對シ)ヲ了シテ七日(二台)十日(二台)自動車  
一輛途中コハレシニ附近ニ故障シ三日蘇澳ニ到着茲ニ本院  
集結ヲ完了ス

二分院 分病室

1. 瀧見臨時分院 自昭和二十一年三月三日  
至 昭和二十一年三月四日 中央山脈中ニ疎開分院トテ開設ス

2. 銅門分病室 自昭和二十一年三月六日  
至 昭和二十一年三月六日 池南本院ト瀧見臨時分院及  
中繼病院トシテ開設ス

3. 營所分病室 自昭和二十一年九月五日  
至 昭和二十一年九月十五日 花蓮港中ニ在リテ第一線式病院ト  
シテ開設ス

三 復員

陸軍

1. 昭和三年一月日台參復第一三三三據り復員下令

2. 花蓮港陸軍病院閉鎖  
本院、昭和三年一月二十五日  
營所分病室 同年一月二十五日  
患者集合所 同年一月二十日

3. 一月三十日 金員鮮澳三集結完了

4. 二月二十六日 乘船、遼鮮澳上登

5. 二月二十六日 基隆到着

6. 三月八日 軍艦八雲ニ乗船

7. 三月八日 基隆港出帆

8. 三月二十三日 大竹、港上陸

9. 三月二十四日 復員完了

指揮隷屬關係及其變更ノ概要

一、第十方面軍直轄 自昭和三年六月十日  
至昭和三年六月

二、独立混成第百二旅團ニ配屬 自昭和三年六月  
至昭和三年十月

三、第六十六師團ニ配屬 自昭和三年十一月  
至昭和三年十二月

陸軍

四、独立混成第三百旅團ニ配属  
人 第六十六師團長ノ命ニ依リ  
昭和三十年十月

五、第六十六師團ニ配属  
左兵團轉進セルニ依リ  
昭和三十年十一月

参加セル主要作戦(戦年)ノ概要  
死傷員数  
昭和三十年六月十日

一、台湾防衛作戦  
自昭和十九年六月十日  
至昭和二十年八月十五日

三、入院患者總數 四六七九名

内譯 昭和十九年度 二一九六名

昭和二十年年度 二二二八名

〃 二十一年度 三五五五名

三、駐屯部隊

独立混成第四百六旅團一第六十六師團一独立混成第三百旅

團一第六十六師團ト愛遷ニシテモ兵團ヲ中核トシ航空

部隊海軍軍直部隊併セ常時兵力一才ヲ下ラス

右部隊入院患者ヲ收療ス

給養

(1) 昭和三十九年度ハ台湾要塞他多花蓮港廢及台東廳下約箇師團

半以上ノ兵力集結シ副食ノ需要急増セルト八月大暴風雨

ニ依リ農作物ニ徹底的ナル打撃ヲ蒙リ他交通路線

寸断セラレ約ニヶ月各地毎ニ孤立化シ物資ノ交流ナク時

野菜ノ入手ハ金ク困難トナリタルモ本院ハ創意工夫ノ上野

草ノ利用及野菜ノ現地自活(耕作約四町歩)ヲシコトクヲ

補ヒタリ

(2) 昭和三十九年度ハ空襲長暴風雨ハ台湾要塞化ノタリノ力不足等

因シ米穀生産産量減少セリ而シテ將來ノ作戦ノタメ相当量備

蓄ヲ要シ爲一般的ニ節米ヲ實施シテ時基礎代謝量ト同程

度ノ養食價迄減少シタルコトアリタルモ南方島嶼作戦ニ比シテ

概シテ良好ニ維持セラレタリ

3. 本院開設以來ノ主食定量及賄料尤記ノ如シ

東京小津編

1925



区分	区分	購料	主食量	期
營内者	四六六九	五	六〇〇	昭和十九年六月
一般患者	六八一			
營内者	四五三			昭和十九年七月
一般患者	四六五			
營内者	四六五			
一般患者	四六五			
結核患者	四九五			自昭和十九年八月 至昭和二十年三月
營内者	五六七			自昭和十九年四月 至昭和十九年七月
一般患者	五六七			
結核患者	七〇三			
右=同	七〇三			同年八月
患者職員	七五〇			〃 九月
右同	七五〇			〃 十月—十一月十八日迄
右同	三〇〇			〃 十月十九日以降
右同	六〇〇			

陸軍

東京小津精

1926

衛生

衛生學的環境

一般ニ良好ナラス殊ニ本院池南ニ移駐後ハ山峽ニ位置スルヲ以テ日照時間少ク且年間ヲ通シテ冷温高濕(鯉魚池ニ隣接シアルノミナラス太平洋上ヨリ水蒸気ヲ多量ニセル排水不良)度降雨セシカ道路其他一帶殆ト泥濘ト化ス建物ハ臨時構築物ニシテ良好ナラス分院分病室ニテハ燬所分病室ノ病院トシテノ既設建物ヲ除イテハ鋸門分病室瀧見臨時分院共ニ良好ナラス

2. 疾病

イマラリア山脚ノ蕃地ニシテコアラエス蚊多ク且コアラリアノ患者ノ入院多カリシモ不拘能ク限リノ衛生工作効ヲ奏シ当院ノ職員ニシテコアラリアニ罹患セル者僅クニ数名ニ過ギス  
 ロ、法定傳染病当院開設以來A型パラチフス患心者

十數名發生ヒト悉ク病室勤務中感染セルモノナリ右以外ノ傳染病發生ナシ

ハ其他特記事項ナシ

終戦ヨリ歸還迄ノ行動概要

1. 本院(池南) 自昭和三十二年八月十五日 至三月五日 從前通病院任務

2. 營所分病室(花蓮港市) 自昭和三十二年十月十五日 至三月三日 從前通病院任務

3. 龍見臨時分院 昭和三十二年九月四日 閉鎖

4. 銅門分病室 昭和三十二年九月六日 ヲ

5. 昭和三十二年十月二十日 接收實施(接收後軍需品当院保管ヲ命ル)

接收員 軍政部台湾区持派員辦公處 軍医中校張局 謹

6. 本院 自昭和三十二年十一月二十二日 至昭和三十二年十一月二十五日 營所分病室 自昭和三十二年十一月二十五日 至昭和三十二年一月二十五日

台湾区第十醫院及其人分病室トシテ從前通病院任務

(当院ハ接收ト同時ニ台湾区第十醫院ト改稱セラル)

久歸國乗船準備ノ急患者全員ヲ蘇澳患者集合所ニ

轉送シ当院ハ保管軍需品ヲ中國側ニ引渡シ病院ヲ閉鎖  
 蘇澳ニ集結シ命セラル之ヲ爲昭和三年十二月二十九日花  
 蓮港埠頭附近ニ患者集合所ヲ開設シ池南本院ヨリ逐次  
 患者ヲ前送シ一月十三日之ヲ完了一月十五日ヨリ一月二十日迄ノ間  
 自動貨車ニ依リ蘇澳患者集合所(台東陸軍之ヲ開  
 設)ニ輸送シ護送員タル本院職員ハ蘇澳ニ待機  
 中國側管理責任者營所分病室楊軍醫少尉(七五師  
 三四團衛生隊附)本院張正鵬軍醫上尉(三四團附)  
 一月十日夜來院  
 接管責任者台灣醫師營所分病室林益滿  
 池南本院 梁 碯太郎 來院  
 營所分病室 一月五日接收引渡完了依而了依而翌十五日閉  
 鎖入池南本院 十二月十五日ヨリ接收ヲ開始十五日完了 依而  
 一月二十五日本院ヲ閉鎖ス

總  
 軍

蘇澳小 東京

1929

9 一月三日歸國乘船準備為蘇澳ニ集結完了  
 10 乘船ノ意 月日 蘇澳ニ発 月日 乘船  
 月日 基隆ニ港 月日 鹿兒島上陸  
 其他部隊ノ經歷中特異ト認メラル事項  
 一 当院編成中ハシテ行動シ且病院任務ヲ遂行セルコト  
 即チ当院ノ編成担任部隊ハ台南陸軍病院ニテ將校以下  
 基幹人員ノ恙者ハ台北陸軍病院ナリ編成ノタメ台南ニ集結  
 シノ急<sup>急</sup>待<sup>待</sup>タス反轉北上(人員院長以下六名貨物約八百箱)基隆  
 隆<sup>隆</sup>到<sup>到</sup>リ六月五日海路花蓮港ニ到リ台南陸軍病院花蓮港分  
 院ニ入<sup>入</sup>リ編成業務並ニ病院任務六月十日編成完結スルコト  
 台南陸軍病院花蓮港分院ハ閉鎖ス  
 二 編成完結スルニ建物無カリレコト  
 創立当初台南陸軍病院花蓮港分院多シ建物全部病室  
 トレテ(收容力七〇名)ノミニレテ之カ急市公會堂(收容力一〇名)

製  
 軍

陸軍小京東

1930

記念館(収容力五〇名)ヲ病室ニ花蓮港木材株式会社ニ階  
 ヲ本部借上リ患者ヲ收容ス開談時既約一〇名ノ患者ヲ收容ス  
 (主トシテマリアノ建者)昭和十九年七月入院患者逐次増加スルヲ以テ附  
 近明海國民学校ノ全部朝日國民学校ノ一部双葉幼稚園ノ  
 全部及民家一棟ヲ借上リ患者ヲ總計約五百名ヲ收容ス  
 病院ノ管理ニ院長ノ令下ニ徹スル如ク集結態勢ヲ在ルハヤ  
 多理想トスルモ今回ハ戦術上必要ナキニ至リ建物都合ニ極度  
 分散スルノ余儀ナキニ至リ創立當初ノ建結鞏固ナルニ任  
 務上分散ニ管理上多大ノ不便アリキ  
 二次員材充足ニ困難アリレコト  
 ハ台湾東部海岸(花蓮港廳台東廳)防衛部隊ヲ独立混  
 成第四十六旅團ニ當院ヲ先分十日前即チ五月十一日編成  
 ヲ終リ当院ト同時ニ花蓮港三陸ニ而シテ同地ニ航空部隊

1931

海軍部隊陸軍船舶部隊其他軍直部隊既ニ駐屯セラリ当院開設  
 ト共ニ患者數増カセリ然ルニニ等病院トシテノ衛生材料被服(患者)  
 等ノ資材ノ中央交付ナク地方調辦ニ奔走スルモ護得量ハ微マタルモ  
 ニテ況ヤ衛生材料「於テハ自院入院患者用ニ不足ナル現況上部隊  
 補給誠ニ困難ヲ極メタリ昭和十九年度末ニ到リニ等病院トシテノ内  
 容ヲ概不充實レ得タリ。

四、本院ノ位置ハ同蕃村ニ在リテ自院並駐屯各部隊兼者收療ニ関シ不便  
 困難アリタルト本院ノ所在地池南ハ山間蕃村ニシテ西ニ高峻ナル中央山脈  
 東ニ周圍約八村ノ鯉魚池ヲ圍シ山ノ鯉魚山トノ間ニ在リ戰術上  
 艦砲射撃ヲ辟ケ得ル位置ニ在リレモ米國機附ノ銃撃手一回爆撃手

(雲上機)ニ依リ機種不明、至近彈三十余發)一回アリ

(納高宮・坂大)

1932

花蓮港市中ノ距離約ニ料票路ニテ交通連絡困難物資ノ取

得輸送<sup>備</sup>罹人ノ通勤困難一年ニニ三面ノ大暴風ニ遭遇セハ忽

々鯉魚池(無<sup>レ</sup>期)に溢<sup>レ</sup>病院敷地迄浸水道路埋没決潰無

敷山崩<sup>レ</sup>等アリテ交通杜絶<sup>レ</sup>之ヲ恢復ニ数ヶ月ヲ要ス池南駐

屯期間ノ半ハ斯ノ如キ交通通信連絡杜絶セル狀況ヲ以テ任務

ヲ遂行ス爲<sup>ニ</sup>入院患者輸送連絡一般給養氷療養品持

別食料<sup>ニ</sup>関<sup>レ</sup>極度ニ不便ヲ感<sup>レ</sup>タリ

五、交通機関ノ無キニト

当院創立後本然ノ固定建築物ナキ急一時借上建築物ヲ使用シ相違

程度擴張南南ニ全面的ニ移動ヲ開始ス然<sup>レ</sup>トモ交通不整備ノ

地ナル依<sup>リ</sup>相違ノ困難アリタリ利用セ<sup>レ</sup>交通機関ハ台東線私設

花蓮港木材株式會社線(翌年殆<sup>ト</sup>流失)牛車自動貨車(然

料ニ制限セラレ)部分ノ以上鉄道ハ途中途)ヲ使用セリ

1933



道路用通ルル期間ハ花蓮港ハスチ常備正花蓮港市ト連絡  
保持ニ努メ之カ通行不能ノ期間ハ徒歩連絡ニ努ム

六、電気設備不便ナリ

陸軍

池南移駐後約半年間ハ電気設備ナク之カ完成後送電  
セラルヤ大暴風雨多ク約半年ニシテ使用不能トナル送電  
線流失シ修復困難(後而電燈及電気医療器械持ニ工  
ハス放線器械無用ニ終レリ)

七、池南ハ衛生学的環境悪シ

池南ハ一年ノ半分ハ雨天ナリ海岸地帯如何ニ晴天多クト雖モ中央  
山脈上層接存スル当地ハ午後必ス降雨アリ且平地ヨリ平均  
気温ニ十三度(攝氏)低ク湿度大ニテ百%ニ近レ以上要之  
院ハ二等病院ノ編成裝備ナク反シ諸條件(施設位置氣象等)  
必ス毫之カ金能力發揮ニ貢献シテラス此種臨時編成病院

三ノ作戦上不便ナル地處位置セシムル場合野戦病院或は裝備  
ヲ可トスル意見ナリ  
陸軍

八、現地自活ヲ徹底的ニ實施ス

人糧秣

昭和十九年九月ヨリ昭和二十年三月迄ハ野菜類ノ地方調辦困難  
ナルニ付現地自活ノ重要ヲ副食指向シ池南本院構内(全面積  
約千町歩ニ約四町歩ノ野菜畑ヲ耕耕作シ野菜ノ自活ニ  
努メタリ尚蛋白質トシテ大小家畜ニ數頭家禽約千羽飼養ス  
且昭和二十年四月以降八月十五日迄ハ作戦ノ様相深刻トナリソノ  
且主食ノ將來ノ補給ノ安全ヲ期スル能ハサルヲ以テ現地自活ノ  
重要ヲ主食ニ指向シ千五百人六ヶ月分ノ收穫ヲ自余トシ池南本  
院構内四町歩池南附近七町歩畔合院銅門分隴病室

1935

一町ニ反營所分極望ニ反歩ノ耕作地ヲ得テ院長以一人百歩時  
間ハ必ズ耕作ニ從事シテ耕サレバ食フカラシメ信念ニ徹シ實施セリ  
八月十五日終戦迄ニ予定面積ノ半ハ耕作セラレタリ

ハ、其間野菜長期保存タメ乾燥野菜約五千五百石ヲ生産ス  
孔、化製物廠ノ衛生材料補給ハ主トシテ兵站在り地若ハ兵站地ニ於テ海員  
施セラレ第一線部隊ハ暑シク不便ヲ感シタリ即チ師團司令部前在  
地タル化製物廠支廠ヨリノ補給少ク台北本廠ニ於テ補給セラルト  
多ク且率領者ハ常ニ第一線部隊ヨリ差来シ補給ヲ受ケタリ  
兵站ノ任務ハ戦力ノ維持推進ニ在リ左ノ状況ハ之ニ遂行スル正ノ  
ニシテ貴重感ナリ

(納時宮・阪大)

1936